隠し剣秋風抄

藤沢周平

文春文庫

文春文庫

192—7

隠し剣秋風抄

定価はカバーに
表示してあります

1984年5月25日　第1刷
1988年2月1日　第8刷

著　者　藤沢周平

発行者　西永達夫

発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL　03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-719207-1

文春文庫

隠し剣秋風抄

藤沢周平

目次

酒乱剣石割り　7
汚名剣双燕　45
女難剣雷切り　83
陽狂剣かげろう　111
偏屈剣蟇ノ舌　147
好色剣流水　181
暗黒剣千鳥　219
孤立剣残月　259
盲目剣谺返し　293
あとがき　332

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto

隠し剣秋風抄

酒乱剣石割り

一

門弟が二人、竹刀を構えてむかい合っていた。対峙してから四半刻ぐらい経っている。それでいてまだ決着がついていないのは、技倆伯仲の証拠だった。

ほかに二人の人物が、無言でその試合を眺めている。一人は道場主の雨貝新五左エ門で、もう一人は次席家老の会沢志摩だった。志摩はおしのびといった恰好で、地味ななりをしている。ほかに人影は見えず、日暮れ近い道場の中はがらんとしている。

明かり取りの高窓から射しこむ光が、二人の門弟の顔面から首筋にかけて、流れる汗を照らし出している。日射しは弱く、日没が近づいていることを示していた。

志摩が、膝を動かして何か言いかけたとき、裂帛の気合いが道場の空気をゆるがした。二人の姿が目まぐるしく交錯し、二合、三合と竹刀を打ちあう音がひびいたあと、もう一度はげしい気合いがひびいた。小柄の方の門弟の身体が、ふっ飛んで倒れた。

「それまで」

雨貝は手をあげて声をかけると、むき直って挨拶する二人には眼もくれずに立ち上がりながら、志摩にこちらへどうぞと言った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto

庭が見渡せる雨貝の居室に、二人が引き返すと、気配を聞きつけた若い内弟子がお茶を運んで来た。

志摩はのどが乾いたらしく、うまそうにお茶を飲んだ。そして庭に眼をやった。庭木がぽつぽつ芽を吹いている。火桶が出ていたが、障子を開いておいても寒くはなかった。

「どちらが上と見ましたかな」

と雨貝が言った。

雨貝新五左エ門は、もと百七十石で郡奉行（こおりぶぎょう）を勤めた人物だが、丹石流の高名な剣士でもあったので、早く隠居して家督を息子に譲り、道場を開いて剣ひと筋の道に入った。家中から雨貝道場に学ぶ者はおよそ百人と言われ、城下でもっとも盛んな道場になっている。

「むろん、勝った方が上だろう」

志摩は雨貝に眼をもどして、無造作に言った。聞くまでもあるまい、という眼つきをした。

だが雨貝は低い笑い声を洩らした。

「ところが、そうではございません。負けた方が技倆は上でござります」

「何じゃと？」

志摩は面長の上品な顔をしかめた。ふっ飛ぶように倒れ、ぶざまに床を滑った小柄な剣士を思い出していた。

志摩は険しい眼をした。

「するとあの男、わしの眼の前でわざと負けたということか」

「いえ、さようではございません」

雨貝はおだやかに否定した。
「勝った中根藤三郎は、当道場の師範代を勤めております。弓削はわざと負けたわけではございません。おだやかに申せば、当道場において中根が一位、二位が弓削。見られたとおりでございます」
「……」
「しかしここ一番という、かりに絶体絶命の試合にのぞんだとき、弓削甚六の剣は、中根の剣を上回ること必定です」
「ほほう。不思議なことを申す」
志摩はじっと雨貝の顔を見つめた。
「このあたりのことは、師匠のそれがしにもわかりかねるところがありましてな。弓削の剣には、それがしにも測り知れぬ何かがございます。そこが、中根の剣をやや上まわると申しあげたところでございます」
「面白い」
「一番一番立ち合わせますと、さきほどのことのような具合になります。いつもあのように、弓削の方に僅かに分がございません。しかし、かりに十番勝負、十五番勝負というものを闘わせたら、どのようなものでございますかな」
雨貝は、自分自身にも問いかけるように、志摩から眼をそらせて、庭に眼を投げた。日は庭隅の高い辛夷の花に移って、さっきまで日の色をとどめていた庭石は白っぽくなっている。
「どうなるかの？」

そう聞いた志摩の顔には、なみなみならぬ熱心ないろが現われていた。雨貝は顔をもどした。
「まず六分四分で、弓削が勝ちをおさめましょうか」
「そうなるか」
「ひとつ、好い例がございます」
雨貝は茶をすすった。
「石割りという秘剣がございます。これは当流にある捨留という剣にそれがしが工夫を加えて、極意としたものでございます」
「……」
「この秘剣を、それがしは中根、弓削どちらに伝えてもよい、というつもりでございました。ところがです。それとなく石割りの伝授にとりかかってみますと、弓削は最後の気息まで難なくつかみましたが、中根は最後のそこのところをついに会得出来ませなんだ」
「ふむ、ふむ」
志摩は興奮したように鼻を鳴らした。
「天賦の才に、わずかに差があるということらしいの」
「さようでございます」
「しかしだ。その甚六が、ああいう具合にころりと負けるのは不思議だの」
「それには、考えられることがひとつございます」
そう言って、雨貝は謹厳な顔ににが笑いを浮かべた。
「何かわけがあるのか」

「弓削甚六は酒毒に犯されておりましてな」
「しゃッ」
志摩はあきれ顔になった。
「きゃつ、飲んだくれか」
「ひらたく申せばさようなことで。しかし、なにでござりますな」
二人の会話は、高邁な剣談から、急に下世話な世間話の色あいを帯びて来たようだった。雨貝は嘆息する口調になった。
「あの癖だけは、なかなか直りませんな。それがしが赤石郡の郡奉行を勤めましたとき、下役に藩中切っての飲み助がおりました。見ておると、昼日中に役所を抜け出して、近間の百姓家に入りこんで一杯馳走になってくる。酒の気が切れることがありませなんだ。あれには手を焼き申した」
「知っておる。杉山権兵衛じゃ」
「や、ご存じでしたか」
「ふむ。やつは飲みすぎて肝を患い、先年おだぶつになりよった」
中老は顔に似あわない、品のない市中言葉を使った。
「そのような噂を聞きましたな」
「甚六もそうか。昼日中から飲むか」
「いや、弓削は城勤めがございますからな。杉山のように、年中赤い顔をしているわけにもいかんでしょう」

「当然だ。酒気を帯びて登城するなどは許さん」
「それに、たとえばしじゅう飲みたくとも、弓削は元来禄高が少なく、また弓削の女房が、なかなかのしまりやだそうでござる」
雨貝の口吻に、どことなく弓削甚六に同情するひびきがあるのをとがめるように、志摩はじろりと雨貝の顔を見た。
「そのぐらいでちょうどよい。飲み助を甘やかすことはいらん」
「さようでござりますな」
雨貝はさからわずに言った。
「弓削の酒は荒れますからな。同じ酒でも杉山は」
「荒れる？」
志摩は雨貝の言葉をさえぎった。
「飲んだくれ、かつ乱れるということかの」
「はあ」
「人に手をあげたりはしまいな」
「それがです」
雨貝は伏目になった。
「当道場の品位にもかかわることで、時おり言い聞かせてはおりまするが、風聞ではかなりの虎に化けるそうで」
「論外だ」

志摩は舌打ちした。
「それでさっきの負けが腑に落ちた。飲んだくれは、やはり信用ならん」
志摩はそう言ったあと、深ぶかと腕組みして考えこんだ。そして顔をあげると、低い声で新五左と呼んだ。
「は」
「わしが今日、二人の試合を見ることは内緒だと申したが、これから言うことはさらに内密の話だ。一切外に洩らしてはならん」
「心得ました」
「さっきの中根だが、彼を松宮の倅と立ち合わせたら勝てるかの？」
「真剣勝負ということでございますか」
雨貝は淡淡とした口調でそう言った。
「その通りだ」
「はて」
雨貝も腕を組んだ。松宮というのは、側用人の松宮久内のことで、倅の左十郎は江戸で忠也派一刀流の免許をうけた剣士である。藩内ではつねに五指に数えられる。
雨貝は、左十郎の剣を案じるように、しばらく黙然と膝に眼を落としたが、やがて腕組みを解いて言った。
「まず互角でございましょうか」
「必ず勝てるとは言えんのか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto